

手話と教育の関わりについて

2年6組28番 平野 希和

アブストラクト(探究内容の要約)

「手話」自体がテレビ、映画、ダンスの振付などで使われている。多様性が重視される今、言葉や文字だけでなく言語として認識されている手話を知ることと人と人を繋げる手段の1つと考える。そこで、手話を義務教育との関わりから探求することにした。

キーワード 手話 義務教育

はじめに

手話とは、手指の動きや表情を使って視覚的に表現する言語である。手話を母語として使う人をろう者という。

今まで関わる機会が少なかった手話だが、テレビドラマの題材やダンスの振付に多く使われているのを見て手話に興味を持った。なぜ最近手話を見る機会が増えているのか。手話が言語として使われていることを社会全体の共通認識にするためだと考える。また、手話が言語として多くの都道府県に条例として定められたのは2016年のことだ。手話が多く取り上げられているのは、手話の言語としての認知度を高め、ろう者の人たちも過ごしやすくするためではないだろうか。

今の社会は街中で手話を見かけると「手話だ!」となる人が多いと思うが、ろう者の人達からすると話しているだけなのである。手話を見かけるのが「当たり前」になる未来があるといいなと考える。

手話を当たり前の社会にするために、誰もが通る道「義務教育」の中で手話に関われる機会を増やし親しみやすいものにしたいと考え、聾学校の先生方にもお話を聞きながら、自分でも手話をやってみることにした。

1 調査

1.1 調査目的

実際に手話を日頃から使っている人に、手話について、その人自身について聞く。

1.2 調査方法

函館ろう学校の手話のできる先生方にお話を聞く。

北海道函館聾学校 8月4日 12時から

林田先生 大高先生 福原先生

2 結果

①「いつ頃から手話に興味を持ち始めたのか」という質問に対し、

林田先生「聾学校に務めると決まってから」

大高先生「手話に興味を持ったというよりは、聾学校に勤務するようになってから手話をやるようになった」

福原先生「普通小学校で働いているとき、友達の手話サークルと一緒にに行くようになったのがきっかけ」

②「手話を始めてからどのくらいの期間で障害を持っている人とコミュニケーションが取れるようになったか」という質問に対し、

林田先生「勉強を始めてから6年目で、今でも十分ではないと感じるが、学校に通っている子どもとはコミュニケーションが取れている。子どもと一緒に手話を学んでいくこともある。函館聾学校では、言葉も発しながら会話をすることもある」

大高先生「自分の手話の力、相手方の手話に対する理解力にもよるため、一概には言えないと思う」

福原先生「手話サークルの中にろう者の方もいたため、勉強する中で自然と会話していた」

③「手話を習う前と習った後での手話への感じ方はどう違うのか」という質問に対し、

林田先生「難しそうというイメージはあったと思う。とてもではないが習得出来そうにないと思っていた。やってみるとジェスチャーみたいなものがあったり、そのままのものもあり面白いと思った。学んだ後の方が手話という言葉の良さが感じられるようになった」

大高先生「テレビの手話通訳の映像を見て、一部でもわかると嬉しくなる」

福原先生「手話は特別な感じがするが、日常の会話の1つ。もともと手話を毛嫌いしていなかった。自分の興味のあることを勉強したいと思って入ったから違和感はないかった」

④「手話が出来て良かったと感じる場面はあるのか」という質問に対し、

林田先生「聴覚障害の人達と会話ができることが嬉しい。他の人に手話の表現を教えてほしいと言われて、答えることが出来たとき」

大高先生「コミュニケーション手段が手話がメインという方とのコミュニケーションをす

るタイミング」

福原先生「大きな声を出せない場所で、内緒話ができる。遠く離れた場所でも、相手が手話を分かれば意思疎通ができる」

⑤「手話と教育の関わりについてどう思うか」という質問に対し、

竹林先生「自閉スペクトラム症の子たちもサインとして手話を使っている子もいたりしたから、聴覚障害の人たちにはもちろん、他の障害の人達にとっても有効な言葉になるのではないかと。障害のある人ない人が、同じ社会と一緒に生きようよというのをもっと進んでほしいと思う」

大高先生「手話も1つの言語としてというのはあるが、必ずみんなが身につけて置かなければならないというのは少し違うと思う。ただ、知っておいたら色々な人と繋がりを持つという部分もあると思う」

福原先生「聴覚障害の子たちにとっても手話は大事。年をとると聞こえなくなってくる。年を取ってから手話を覚えるのは難しいため、小さいときから触れておくと思疎通が図れるのではないかなと思う」

3人の先生方の話を聞いて見つけた共通点

「手話は英語と同じような感覚」であるということ。

→習ったものを実際に使って、伝わると嬉しくなる。もっと学んでみたくなる。

3 考察

手話に触れてくる機会が少ないため、興味を持つきっかけになるタイミングがあまりない考える。手話に触れる機会が増えたら、興味を持つ人も増えてくるのではないかと。

最近では、「手話シャワー」「みんなの手話」「NPO法人 手話えもん」など手話を学べるサイトが増えている。誰でも簡単に見ることができる。これらを活用して義務教育の現場で、手話に触れることもできると考える。

4 まとめと結論

必ず「授業」の形で取り入れようとしなくても良いと考えた。私の方策として、朝読書の時間に取り入れることとする。そうすることで、先生方も新たに学び直す必要はなく、生徒たちと一緒に手話に関わることができる。

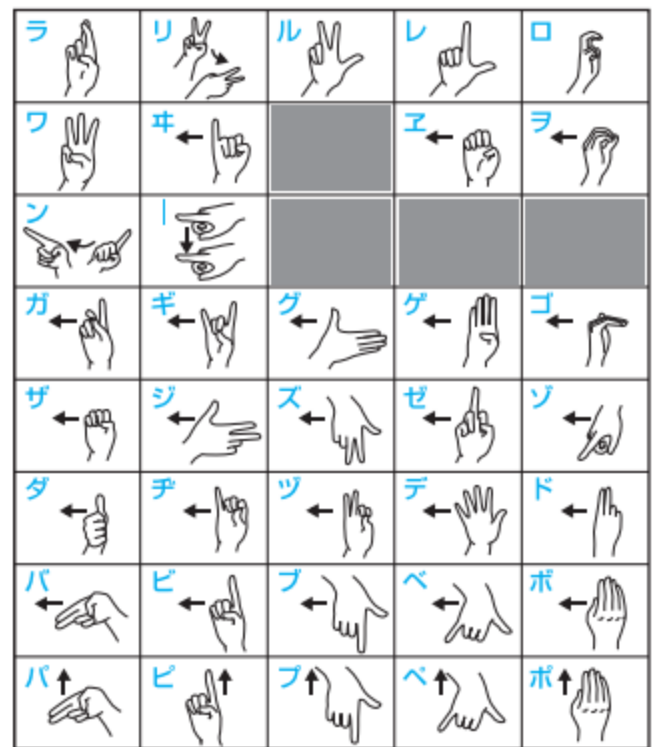
さらに、朝読書の時間を少しでも障害を理解することに使うことが出来たら、視覚障害の方が使うコミュニケーションツールである点字にも関わることが出来るかと考える。

また、授業として取り入れないことで手話や点字へのハードルが少しは下がるのではないかと考える。

5 課題

どのぐらいの頻度で行っていくのか。(必ず週に1回取り入れなければならないのか)手話や点字のテストは行うのか。小学生が実際に行ってみてどのように感じるか。これらのことも探究していかなければならない。

また、手話は右利きを基本として作られているため、左利きには少し複雑で難しい。繰り返し練習して覚えるのに加え、表情も意識して取り組んでいきたい。



6 謝辞

この研究は北海道函館聾学校の補助を受けて実施したものです。ご教示いただいた先生方に感謝申し上げます。

7 参考文献

1) 北斗市手話言語条例 平成31年4月1日施行

2) 手話とは？

<https://www.town.oizumi.gunma.jp/s013/kenko/010/270/syuwagenngopanhu.pdf>

3) 手話の条例の広がり

<https://www.jfd.or.jp/info/misc/sgh/20200124-sgh-shuwadego3.pdf>

4) 指文字の表

<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/854858/syuwa-purininto.pdf>